

＜小学校 道德＞

内面に根ざした道德性の育成を目指して

ー モラルジレンマの授業を実践してー

東風平町立白川小学校教諭 前 里 朱 美

目 次

I 研究テーマ設定の理由	73
II 研究の仮説	73
III 研究の全体構想図	74
IV 研究内容	74
1 テーマについての基本的な考え	74
2 道德の時間のあり方	75
3 道德の時間を行う前に必要なこと	76
4 モラルジレンマの授業を実践する意味	78
V 授業実践	80
1 主題名	80
2 主題設定の理由	80
3 本時の指導目標	81
4 授業仮説	81
5 展開	81
6 授業の反省と考察	82
VI 研究の成果と課題	82

〈小学校 道徳〉

内面に根ざした道徳性の育成を目指して

— モラルジレンマの授業を実践して —

東風平町立白川小学校教諭 前 里 朱 美

I 研究テーマ設定の理由

近年起こった事件の中には、人間性を疑うようなものが数々と含まれている。実験的な感覚で動物に危害を加えたり、集団いじめや自殺など、物質的には豊かになった反面、人間性を軽視し生命を尊ぶ心が失われていくのを感じずにはいられない。児童による問題行動の数々が、度々社会問題として取り上げられるようになり、改めて子供の道徳性の欠如を危惧する声があがってきている。

近い将来、今まで以上に科学技術が著しく進歩し、誇大な情報と多様な価値観が氾濫すると予想される。過疎化や都市化の進行、核家族化や少子化の増加により地域社会の連帯感の希薄化も予想される。人は人との関わりや共感的な体験から「思いやりの心」や「生命を尊ぶ心」「公德心」「役割自覚」「責任」等を学び、道徳性が育まれていく。しかし、科学技術の進歩や、核家族化、地域社会の連帯感の希薄化はそのような道徳性が育まれる場が減少していく要因になると考えられる。多様な価値と溢れんばかりの情報に囲まれても、社会の方からどう生きればよいか示してもらえないことはない。これからの時代において「自分の生き方」を「選び取り」、「自分の人生をつくりあげていく力」がどうしても必要になる。そのような力をつけていくためには人間としての在り方を自覚し、よりよい生き方を求めていくことのできる道徳性の育成が子供たちにとって必要だと考える。21世紀を担う子供達への教育の指針を示した中教審の「審議のまとめ」においても、教育においてはどんなに社会が変化しようとも「時代を越えて変わることのない価値のあるもの」（不易）があると示しており、それは豊かな人間性、正義感や公正さを重んじる心、自らを律しつつ他人と協調し他人を思いやる心、人権を尊重する心、自然を愛する心を子供達に培うことと提言されており、それらは道徳性につながる事項である。道徳性の育成については、教育活動全体を通して行わなければならない。しかしここでは、道徳の時間の指導を中心に考えてみたい。

道徳の時間は、教育活動全体を通じて行われた道徳教育を補充、深化、統合する時間である。今までの実践を振り返ってみると、教師主導型の画一的な授業が多く、価値の押し付けになりがちであった。児童の発言も抽象的なものが多く、本心をゆさぶるような展開ができなかった。そのため、授業の中では資料を通してねらいとする価値に近づけたかのように思えるのだが、きれいごとの授業で終わっているため行動が伴わないと感じることも多かった。

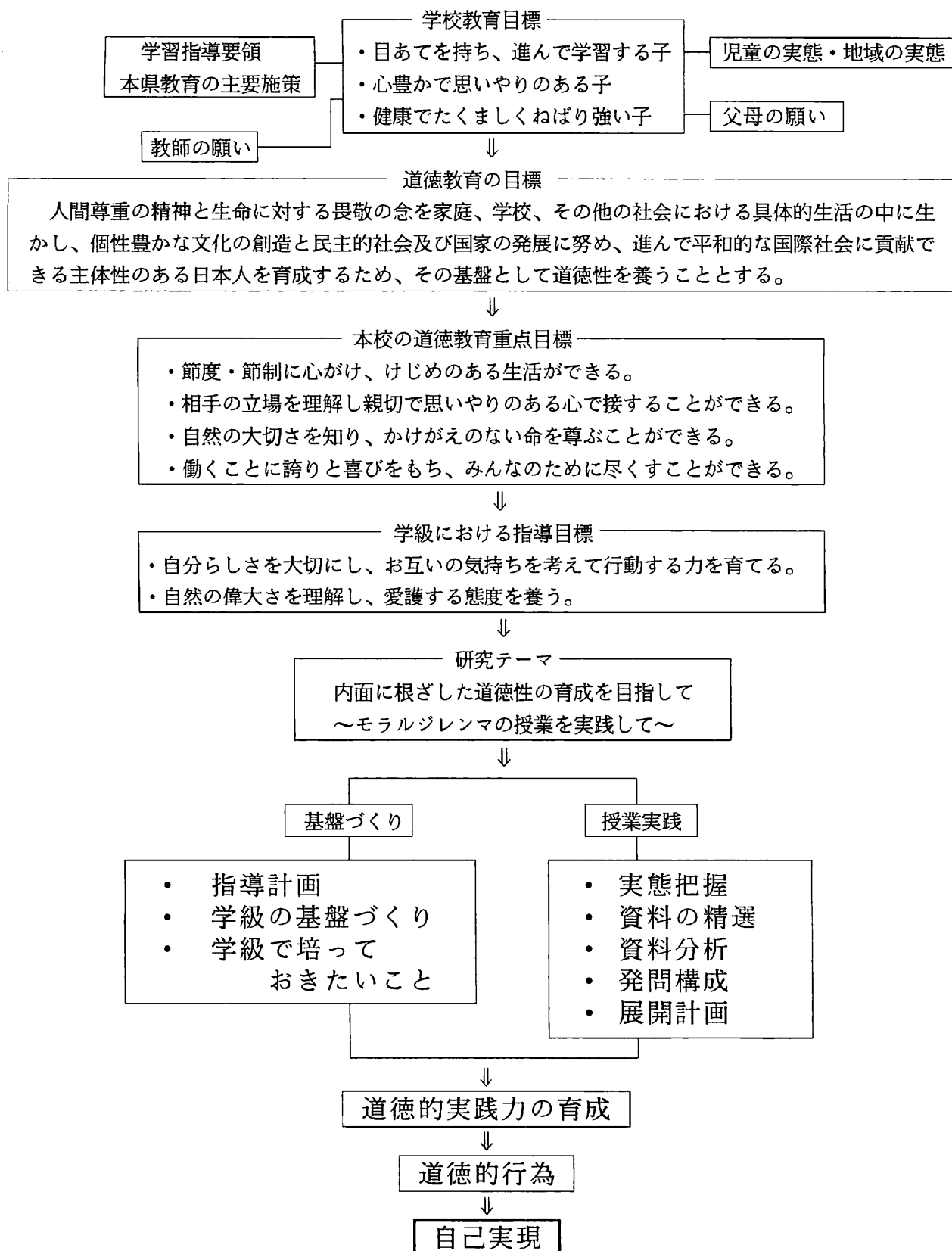
人間としての在り方を自覚したよりよい生き方を求めていくことのできる道徳性を培うためには、それらの道徳性を強制するのではなく、自らの心に浸透した「内面に根ざした」ものでなければならない。それは道徳の時間において児童の心をゆさぶりより高い価値に内面化させるために、何が最も大切なのかをモラルジレンマさせることが大きなカギになると考えた。

授業展開においてモラルジレンマすることで、内面に根ざした道徳性の育成へと近づき、将来自分の生き方をよりよく選び取ることのできる力へとつなげていきたいと考え、本テーマを設定した。

II 研究仮説

授業展開の中でモラルジレンマさせることで、内面に根ざした道徳性の育成へと近づくことができるであろう。

Ⅲ 研究の全体構想図



Ⅳ 研究内容

1 研究テーマについての基本的な考え

(1) 道徳性の育成について（一部、小学校指導書より抜粋）

道徳性とは、人間としての本来的な在り方や生き方を目指してなされる道徳的行動を可能にする人

格の基盤となるものである。道徳的行為は、目の前に起こった問題に対して何らかの道徳的心情を抱き、そしてとるべき行為を判断し、実践意欲、態度へと結びつくことによってなされる。つまり道徳的行為は、道徳的心情、道徳的判断力、道徳の実践意欲、態度に支えられて成り立つ。

道徳的心情は、善を行うことを喜び、悪を憎む感情のことであり、善を志向する感情である。それは道徳的行為の動機づけとして強く作用するものである。道徳的心情を養うことは道徳性を高めるための基礎的要件である。

道徳的判断力は、それぞれの場面において善悪を判断する能力であり、人間として望ましい生き方をしていくために必要な基本的能力である。的確な道徳的判断力をもつことによって、それぞれの場面において機に応じた道徳的行為をすることが可能になる。

道徳の実践意欲と態度は、道徳的心情や道徳的判断力によって価値があるとされた行動をとろうとする傾向性を意味する。道徳の実践意欲は、道徳的心情や道徳的判断を基礎とし道徳的価値を実現しようとする意志の働きであり、道徳的態度は、それらに裏付けられた具体的な道徳的行為への身構えということができる。

これらの道徳性の諸様相は、それぞれが独立した特性ではなく、相互に深く関連しながら一つの全体を構成しているものである。したがって、より高い道徳性を育成し内面化させることは、より高い道徳的行為への基盤をつくることになるのである。(図1)

(2) 道徳性の発達の実態把握

人間は、日々の生活において様々なかかわりを通して道徳性が育成されていく。道徳の時間においてより高い道徳性の育成を目指すならば、児童の道徳性の発達段階の実態を把握する必要があると考える。道徳性を高めるための手立てが、明確になってくるからである。

実態把握の方法として、学校生活のなかで観察する方法、道徳性検査や自作の質問紙、アンケート等から把握する方法が考えられる。コールバーグにおいては、「道徳性が発達するというのは、道徳的な判断や推論つまり道徳的な認識(見方、考え方)が変化することをいう」と述べている。そのことから、問題場面に出会ったときの判断の仕方によって道徳性の発達段階が把握でき、判断のレベルが高い方に変化すると、道徳性が高まったと考えてよいということになる。

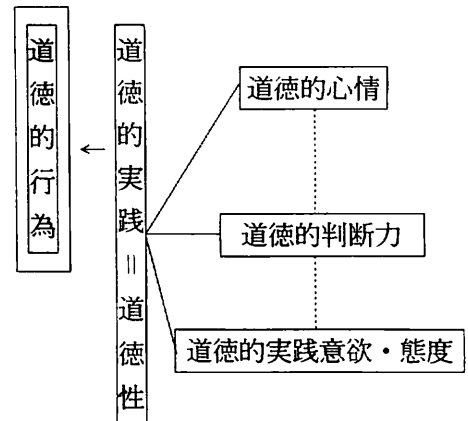
コールバーグは道徳性の発達には、三つの水準と六つの段階があると述べている。また、荒木氏は資料における児童の判断・理由づけから道徳性の発達段階を三段階に分けている。それらも参考にしながら、道徳性の発達段階が把握できるであろう。

2 道徳の時間のあり方

人間は、本来人間としてよりよく生きたいという願いをもっている。この願いの実現を目指して生きようとするところに道徳が成り立つ。道徳教育とは、人間が本来もっているような願いやよりよい生き方を求め実践する人間の育成を目指し、その基盤となる道徳性を養う教育活動である(小学校指導書)。道徳の時間においては「自分を見つめる」時間とし子供達が多様な考えを出し合う中で自らの考えを見つめ、内なる自分を知っていく時間ととらえたい。子供達自身が道徳的価値についてどのように考えていたかを知ることや、資料の主人公に自分を投影し、自分の感じ方、考え方を見つめることができたり、自分と異なる友達の意見を聞くことにより道徳性が高められるような時間としたい。

しかし、週に1時間の道徳の時間で内面に根ざした道徳性を培うのは難しい。教育活動全般において道徳的価値について学習し、それを補充、深化、統合する時間であれば、道徳性が調和的に内面化していくものとする。

図1 道徳性の育成のイメージ



3 道德の時間を行う前に必要なこと

(1) 指導計画をたてる

道德の時間は、資料を用いてねらいとする道德的価値に近づき、道德性を高めていく時間である。しかし、道德的価値を追求することのみで終わってしまう場合も多い。道德性を高めるためには、資料の中で起こった問題場面や、主人公のおかれている状況等に自分を投影したり、今までの自分の考え方、感じ方を照らし合わせることで「自分を見つめる」ことが必要だと考える。自分には起こり得ないこととして、資料と自分自身との距離があっては道德性を高め内面化させるための授業は展開できない。そこで、児童の実態や教師の願いなどをもとに学級における指導計画を作成することで、道德の時間を充実したものにするための手立てとしたい。指導計画には道德の時間だけでなく、教科指導の中での重点、行事（体験活動）、朝の会・帰りの会、その他の手立ての項目も設ける。教科指導の中での重点、行事（体験活動）は道德性をさらに高め、実践する場を作る事後指導となる。朝の会・帰りの会、その他の手立ては

道德の時間に資料を通して考えさせたいことへの意識付けをする事前指導となる。このように、普段の学校生活から道德教育を進めていくことを基本とする。そうすることで、道德性を高め内面化させることのできる道德の授業が可能になると考える。（図2、表1）

図2 内面に根ざした道德性を育成するための手立て

(2) 学級の基盤づくり

道德の時間においては、児童一人ひとりが本音を出し合

えるような雰囲気づくりをしておくことが絶対条件となる。自分の価値観だけでなく、多様な価値観を出し合うことで、道德性が高まると考えるからである。このような機会を設けても、本音を出し合えなければ道德性は高められない。そこでこのような雰囲気づくりをするための手立てを考えてみた。

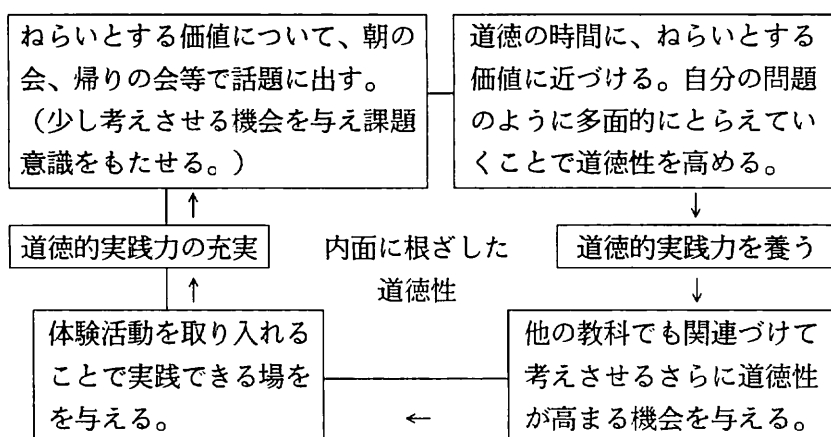
- ・教師は普段の学校生活において、どのような意見に対しても受容的な態度をとり、児童に安心感を与えることで心を開けるようにする。
- ・学級の中で差別や偏見があっては本音を出し合って高め合うような雰囲気を作れない。差別、偏見につながる児童の行為に対しては厳しく指導し、一人ひとりの存在を大切にする学級作りをする。
- ・お互いのよさを知る機会を与える。お互いのよさを認め合う場づくりをする。（学級通信を発行しその中で児童一人ひとりのすばらしい面を載せる。帰りの会では一日の中で見つけた友達の良い面やがんばっていたこと等を発表し、よさを認め合う場を設ける等。）

(3) 学級で培っておきたいこと

道德の時間に、自分の価値観と他の人の道德的価値を比較しながら吟味したり、他者の視点からも検討することで道德性を高めることができる。

荒木氏は、モラルジレンマの授業を実践する際に担任教師として日頃から次のようなことを心掛け学級で培っておくよう記している。

- ・子供が自分の考えをしっかりと持つ。
- ・自分の考えや感じていることを必ず口に出す。
- ・はっきりとしゃべる。
- ・相手が言うことをしっかりと最後まで聞く。
- ・相手の言うことを自分の考えや感じ方と比べる。
- ・自分の考えのおかしなところ足りないところを修正し、もう一度相手に話す。



	〈朝の会〉	〈帰りの会〉
朝の会・帰りの会	・学級の歌・3分間スピーチ(児童)・話題のニュースから・絵本の読み聞かせ(教師)	・みんなに知らせたいこと・よかったさがし(児童)・日記、家庭学習帳の中から(教師)
その他の手立て	・グループ学習や学級会を活性化させることで、他の人の考え方と自分の考え方を比べる機会を与えたい。 ・一人一人が本音を出し合えるような学級の雰囲気づくりをするために、教師としてはどのような意見にたいしても受容的な態度をとりたい。児童に対しては、相手の言うことをしっかり最後まで聞くよう指導したい。 ・学級通信を発行する中で、児童に対する教師の願いを間接的に伝えていきたい。また、児童のすばらしい面を載せることでお互いのよさを認め合う場をつくり、心を開き安心して発言できる学級の雰囲気づくりをしたい。	

4 モラルジレンマの授業を实践する意味

道徳的行為は、判断から行為まで連続的流れとしてとらえられる。したがって、行為が道徳的に意味をもつためには、道徳的に価値ある行為であるという判断が先行していなければならない。つまり、いくら意欲があっても意志強固であっても、忍耐力に恵まれていても、自我が強くて善とか悪とかの道徳的判断がなされない限り、そこで生じた行動に道徳的価値があるものとは言えないのである。このように、道徳的行為により道徳的判断力は不可欠の要素である。

そこで、道徳の時間において道徳的価値の葛藤（モラルジレンマ）をさせ、児童生徒一人ひとりの道徳的判断力を育成し、道徳性をより高い発達段階に近づけ内面化を目指したい。

○ モラルジレンマを深めるための工夫

① 資料について

子供が何か新しい事実や世界を知るものでなければならない。はじめから先生のいいたいことが児童にわかっているようであれば、子供の心を揺り動かすことはできない。今もっている精一杯の個々の判断力によって、問題解決にとって何が一番よい方法なのかを考えさせることは道徳性を高めるための出発点であるとする。このようなことを考慮すると、問題解決における結論が明らかになっていないことで児童が考え合う余地をもつもの（オープンエンド）は、モラルジレンマにとって効果的であるとする。

② 発問構成について

道徳の授業は言わば自然のありのままの自分を基に、今までの自分を振り返り自覚を深める時間である。道徳性を高め、内面化できるような授業展開にするためには、児童一人ひとりが自らの内面に対する問いかけがどれだけできたか否かにかかっている。よって、発問構成は重要な役割を占める。

発問には「基本発問」と「中心発問」がある。中心発問は、その資料においてねらいに迫るためのカギとなる発問である。児童が自分の感じ方考え方をひとりひとり自由に出し合えるような発問であることが望ましい。青木氏は「中心発問は子供の本音が出るもの、自我関与できるものが望ましい。」とし、「30人いれば30通りの考えが出るようなもの」と例を示している。そのような発問をすることで、様々な「道徳的判断」を知る機会を与えることになり、児童が自分自身の「道徳的判断」を振り返ることへと導ける。そして自分の価値観だけでなく、他の人の道徳的価値とも比較しながら吟味したり、他者の視点からも検討することへと発展させることで、より高い道徳性に近づくことができると考える。基本発問は、中心発問を支えるための補助的な役割を担っている。

発問構成における留意事項として次のことを挙げたい。

- ・正誤を問うたり、模範的な解答を要求するものでないもの。
- ・資料中の文章表現を問うたり、筋を追う発問にとどまらず、事実の奥にある自分の感じ方、考え方を問うもの。
- ・何を考えればよいのか、分かりやすく答えやすいもの。
- ・資料中の人物などに共感することができような発問。
- ・一人ひとりが、自分の感じ方や考え方を自由に表現できるようにする。

これらのことに留意してよりよい発問構成をすることで、児童が自らの内面に対する問いかけをし

道徳性を高め内面化できることを目指したい。

荒木氏はコールバーグ理論に基づいた授業過程として、四つの段階を想定している。その授業過程における発問構成は表1のとおりである。

表1 荒木氏による授業過程と発問構成

授業過程の段階	発問構成	留意点
一段階 道徳的ジレンマの共通理解	①資料についての発問 ②資料と子供の生活をつなげる発問 ③問題を明確化する発問	・児童・生徒の思い込みによる勝手な資料解釈を防ぐために、資料読み取りを丁寧に行う。
二段階 自己の考えの明確化	①己の考えを明確化する発問 ②他者の考えを検討させる発問	・モラルジレンマに対してその子なりの考えをもたせる。
三段階 モラルディスカッション	③より高い段階の考えを引き出す発問 ④役割取得(他者の立場、第三者の立場で考える)発問 ⑤行為の結果が他者にどのような影響を及ぼすか推理する一般的な発問	・道徳判断のための思考の道筋を明らかにする。 ・子ども一人ひとりが属する道徳性の発達よりも一段階上の道徳的思考に触れさせるようにする。
四段階 道徳的判断	①道徳的判断を求める発問	・自己の考えとディスカッションで出されたさまざまな意見の間で判断が行われるように働きかける。

③ 授業展開における工夫

(1) 導入について

本時の学習内容にかかわる経験の想起を促す。そうすることで、登場人物に即しつつも、自分自身とかかわらせながら、考えを深めていくことが可能になる。

(2) 展開について

資料の中の葛藤場面において、主人公のとるべき行為への判断をしっかりさせるために、主人公のおかれている状況、迷いをきちんと把握させることが大切である。場面絵等を利用して視覚に訴えるのも効果的である。しかし、主人公のとるべき行為についての判断に時間がかかりそうな場合は2時間取り扱いとする方が望ましいと考える。第1時は、資料の内容について深め葛藤場面における主人公のとるべき行為への判断と理由づけまでを学習内容とし、2時間目は自分の考える判断、理由づけを発表したり、ディスカッションするという学習内容である。

ディスカッションをすることは多様な「道徳的価値」を引き出し、他の人の「道徳的価値」とも比較しながら吟味したり、他者の視点からも検討させたりして葛藤させることで、道徳性を高めていける重要な活動と考える。ディスカッションを活発にするために、葛藤場面においてとるべき行為を判断した理由づけまでしっかり書かせておいたほうがよい。自分の道徳的価値が明確化され課題意識を持ってディスカッションに参加することができるからだ。

また児童が書いた判断、理由づけを事前に把握しておき、意図的に一段階高い道徳性に触れさせるための発問を用意する。ディスカッションの中で一段階高い道徳性に気づかせるための方向づけをするのである。

④ ワークシートについて

自分自身の判断となぜそう思うのかが明確化するよう、書く欄をいれるようにしたい。

自分と違った様々な考え方があることに気づき、道徳的によりよい、優れた考えに自分の考えを練り上げることができるよう、授業の終わりで自分の考えを「書く」ことを求めたい。

教師にとっても、ワークシートは子供達の価値の高まり、変容を確認するための大切な手立てとなる。ディスカッションに参加できなかった子がいても、その子の内面を見ることができる。

V 授業実践

1 主題名 「誰に対しても公正、公平に接し、正義の実現に努める。」(4-③)

2 主題設定の理由

(1) 教材観

○ ねらいとする価値について

民主主義社会の基本的な価値は社会正義である。

社会正義は、社会的な認識能力と人間の平等間に基づく人間愛が基本となる。集団や社会とのかかわりに対して、自分自身はどうあらねばならないかという高学年としての自覚が芽生えるこの期に、公正、公平に対する理解を高め、より高い道徳的判断力を育てたい。

○ 資料について 「計時係」

この資料は、学級対抗のバスケットボール大会において、計時係を努める主人公義男が、一郎の逆転シュートに見入ってしまい、試合終了を10秒遅れて告げてしまうという内容である。

義男は、逆転して喜んでいる3組のみんなと、この試合に出場するために努力して来た一郎を前に10秒過ぎたことを先生に知らせようかどうかためらっている。その義男の立場に自分自身を置き換えて、「言う」か「言わないか」のモラルジレンマをさせることによって、公正、公平に対する理解を高め、より高い道徳的判断力を育てていくことのできる資料である。

(2) 児童観

明るくて素直な子が多い。

友人関係においては、1学期後半ごろから仲のよい者同士のグループができ、主にそのグループで行動するようになった。しかしその中で孤立しがちなMさんの存在がある。

Mさんは体が弱く学校を休むことが多かったためか、友達と話したりすることの経験不足が感じられる。友達との会話もぎこちない。体を動かすことの苦手なMさんは、学級で流行のゴムとびや鬼ごっこ等の遊びについていけず、溝ができていく。そんなMさんに対しても、偏見をもつことなくよいところを見つけて、仲良くなれるよう指導してきたが、温かく受け入れてあげる学級の雰囲気はまだ不十分である。親友には甘い、親友以外には無関心という面が見られる。

今回は「計時係」の資料を通して、主人公の行動からモラルジレンマさせ、公正、公平に対する理解を高め、より高い道徳的心情、道徳的判断力を育てたいと考える。ひいては、思いやりの心へと発展することを期待したい。

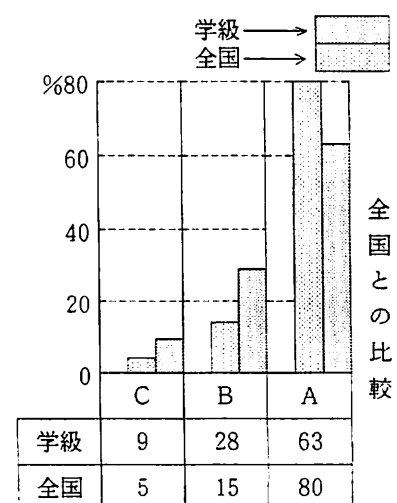
道徳性検査(教研式ヒューマン)の結果は、「主として集団や社会とのかかわりに関すること」の項目でCと判定されている児童が多かった。

4-(3)公正公平については、全国平均出現率と比べてはとんど差がない。しかし、普段の学校生活の観察からは、公正公平に対する態度はまだ不十分と感じる。

教師の観察と検査結果に違いが生じているのは公正公平について理解しているものの、実践には結び付いていないということが考えられる。

道徳の時間にモラルジレンマすることで、公正、公平に対する理解、道徳的心情、道徳的判断力を高め、実践力を育てたい。

道徳性検査結果 4-(3)公正公平



第1時の児童の判断、理由づけは次の通りであった。

番号 名前	判断	理由づけ	段階
1.	言わない	一郎君にとって初めて試合に出てシュートして入ったから。	3
2.	言う	一郎君には悪いが、審判だから平等にしないといけない。	2
3.	言う	うその試合でシュートを決めても一郎君はうれしくない。	2
4.	言う	親友だけどうそを言うのはいやだから。	2
5.	言わない	一郎君が負けてしまうから。親友には勝たせたい。	1
6.	言う	先生にいい言わないと卑怯。ひいきになる。	2
7.	言わない	親友だからいったら裏切るみたいだから。	1
8.	言う	2組だって困る。一郎君ににらまれたってはっきりさせる。 もし怒ったら、本当の親友じゃない。	3

10秒過ぎたことを先生に言う24名、言わない8名という結果が出た。

それぞれの理由づけを『モラルジレンマ資料と授業展開』（荒木紀幸 編著）の判断・理由づけ段階表を参考に道徳性の発達段階1～3に分類してみた（段階1 罰—従順志向、段階2 道具的—相對主義、段階3—他者への同調）。この結果からも、公正、公平のねらいに近い「言う」の理由づけ

をした児童は24名もいたが、段階1の児童が占める割合が高いことがわかる。

先生に言う	先生に言わない
段階1 8名	段階1 4名
段階2 14名	段階2 2名
段階3 2名	段階3 2名

本時では、段階の低い理由づけと高い理由づけをディスカッションさせることでより高い道徳的判断力を育てたいと考える。

(3) 指導観・・・・・・・・・・（省略）

3 本時の指導目標

ディスカッションを通して、公正公平に対する理解を高め、より高い道徳的判断力を育てる。

4 授業仮説

モラルジレンマさせることで道徳的価値の明確化が生じ、道徳的判断力を高めることができるであろう。

5 展開

	学 習 活 動	主な発問と予想される児童の反応	指導上の留意点
導入 5分	1. 資料のあらすじを振り返り、課題に対する自分の考えを認める。	・前の時間に書いた自分の考えを確認しましょう。	・前もってワークシートを配っておく
前 段 27 分	2. 全員の判断を知る。 3. 今日の課題を知る。 4. ディスカッションする。	・みんなの判断を見てみましょう。 ・もし自分が義男君だったらどうするかみんなで考え、話し合しましょう。 ・自分の考えを発表しましょう。 言◇一郎君に嫌われる。 わ◇10秒くらいはいいだろう。 な◇いまさら言えない。 い◇一郎君は陰で一生懸命努力したんだ。ここで無にしてしまうのはかわいそう。	・それぞれの考えを意思表示カードで提示する。 ・公正、公平に対する道徳的価値が高まっていくよう意図的指名をとりいれたい。

後段 8分	5. 最終的な自分の考えをまとめる。	言◆一郎君も分かってくれる う◆他のみんなも頑張っているのだから。 ◆ゲームはルールを守って成立する。 ・義男君は結局どのような判断をしたと思いますか。	・ワークシートに書かせる。
終末 5分	6. 教師の説話を聞く。	・公正公平の大切さについて説話でまとめる。	

6 授業の反省と考察

- ・ディスカッションをするための訓練がしっかりなされてないため、教師主導型で話し合いを進めた。児童が中心になってディスカッションを進めることができたなら、もっと和やかな雰囲気の中で本音を引き出すことができ、道徳性を高めるきっかけが見いだせたと思う。
- ・児童にとって身近に起こりえる内容の資料だったので関心を持ち、主人公の葛藤場面においてはどのような行為をとるべきか真剣に考えていた。
- ・理由づけをしっかりとさせ、道徳性の発達段階を教師側が把握することで、道徳性の低い考え方から道徳性の高い考え方へと授業を展開することができた。
- ・他の道徳的価値と比較しながら吟味したり、他者への視点からも検討したりする機会を与えることは、より内面に根ざした道徳性を目指すうえで重要だということが確認できた。

先生に言う			先生に言わない		
第1時		第2時	第1時		第2時
段階 1	8 名	→ 3 名	段階 1	4 名	→ 1 名
段階 2	14 名	→ 12 名	段階 2	2 名	→ 5 名
段階 3	2 名	→ 7 名	段階 3	2 名	→ 2 名
無答			2 名		

VI 研究の成果と課題

成 果

- ・よりモラルジレンマさせるための手立てを自分なりに捉えることができた。
- ・道徳の時間においては、資料の中でモラルジレンマさせ、発表やディスカッションをさせることで、より高い道徳性を知る機会になる。それを通して、自分自身の「道徳的判断」を振り返ってみたり、他の児童の「道徳的判断」と比較、吟味することでより高い道徳性へと導くことができる。内面に根ざした道徳性に近づくには効果的であることが確認できた。
- ・内面に根ざした道徳性を育成するために、他の教科、体験活動等と関連づけた指導計画を作成することで実践への手立てができた。

課 題

- ・効果的に道徳教育を進めていくための、家庭との連携の在り方。
- ・学級経営における雰囲気づくりの工夫。
- ・一人ひとりの児童の内面に迫るような資料選択と指導の継続。

〈主な参考文献〉

荒木紀幸著	『ジレンマ資料による道徳授業改革』	明治図書	1990年
荒木紀幸編著	『モラルジレンマ資料と授業展開』	明治図書	1990年
石川県小松市立稚松小学校	『心はずませ、生き生きと活動する子供を育てる』		
	初等教育資料28～33	(株)東洋館出版	1997年7月号
月刊誌	『道徳教育』	明治図書	1997年4～12
月号櫻井育男著	『道徳的判断力をどう高めるか』	北大路書房	1997年
諸富祥彦著	『道徳授業の革新「価値の明確化」で生きる力を育てる』	明治図書	1997年